

史跡等の指定等

《特別史跡の指定》 1件

1 ^{かそりかいづか}加曽利貝塚【千葉県千葉市】

縄文時代中期の直径140mの環状の北貝塚と、縄文時代後期の長径190mの馬蹄形の南貝塚から成る大規模な集落跡である。この規模は、東京湾東岸の北部に集中する大型環状・馬蹄形貝塚群のなかではもちろん、全国的にみても最大級で、遺存状態も極めて良好であり、また縄文時代中期中葉から晩期中葉までの集落変遷も詳細に追える稀有な事例である。遺構や遺物からは当時の生活復元、例えば、丁寧に埋葬されたイヌからは人とイヌとの親密な関係性がわかり、動物遺存体からは当時の生業や食生活の復元ができ、さらには、他地域から搬入された装身具等からは広域交流の実態解明も可能である。

この他に、考古学史的にみると、加曽利貝塚は明治期から今日まで継続して研究されている稀有な遺跡であり、この研究を通して加曽利E式土器や加曽利B式土器が設定されるなど、その重要性は極めて高い。そのうえ、昭和30年代後半期に全国展開した保存運動は埋蔵文化財保護の歴史を代表するものであり、貝塚断面を直接観察できる整備手法や博物館活動は埋蔵文化財の整備・活用に関する先駆的存在として知られ、教科書に掲載される等、知名度も高く、広く国民に知られ親しまれた、我が国文化の象徴として特に重要な史跡である。

《史跡の新指定》 11件

1 ^{いり さわいせき}入の沢遺跡【宮城県栗原市】

宮城県北西部に広がる築館丘陵の東部に位置する。周辺の平野部からは比高差23～26mの丘陵の先端部という立地であることと、幅2～4m、深さ4mの大溝とその内側に平行する材木堀による施設が示すように、極めて防御性の高い古墳時代前期後半（4世紀後半）の大規模集落遺跡である。そのうえ、存続期間は短く、ヤマト政権との関係性が深い当該期の大型古墳が副葬品として有するような、銅鏡・鉄製品・石製装身具・各種土師器類等が意図的に焼失されたと考えられる竪穴建物から多数出土する特殊性も窺うことができる。また、遺跡の遺存状態も極めて良好であり、当該期の東日本を見渡しても類例がほとんどない遺跡として重要である。

この地域は、当該期においては古墳時代前期の大型古墳の北限域、すなわち、ヤマト政

権の勢力がおよぶ北限域に相当し、この地域周辺の丘陵部や北方には続縄文文化が存在する。したがって、ここに高い防御性を備え、そのうえヤマト政権との関係性が高い品々を多数保有する大規模集落が短期間存在する事実は、当該期におけるヤマト政権の東北政策の在り方や、続縄文文化との関係性の解明等、古墳文化の本質を考える上で重要である。

2 ^{かわらつかかまあと}瓦塚窯跡【茨城県石岡市】

古代常陸国の窯跡である。昭和43年以降の調査により、南北130m、東西80mの範囲に合計35基の窯が築かれたことが判明した。操業は7世紀前葉から10世紀前葉に及ぶ。窯構造は大半が地下式^{あながま}である。7世紀前葉から中葉の須恵器生産に際して窯としての操業が始まり、8世紀前葉には須恵器とともに茨城^{ばらきはいじ}廃寺の瓦を生産する瓦陶兼業窯となった。

8世紀中葉の新しい段階には瓦専業窯となって、窯の数が増えるなど窯場としての規模が拡大し、瓦生産の画期を迎える。9世紀以降には瓦塚窯跡が国府窯として常陸国の中心瓦窯となり、茨城郡外の寺院にも瓦を供給するようになる。10世紀前葉には多数の窯が比較的短期間ごとに作りかえられつつ常陸国分寺の終焉まで操業される。

このように、瓦塚窯跡は古代常陸国における瓦生産の導入過程から、常陸国府・常陸国分寺の造瓦体制の確立及び終焉までを一遺跡で知ることができる点で重要であるとともに、一つの瓦窯としては窯の基数や密度においても突出し、遺存状態も非常に良好である。

3 ^{いづみさかした いせき}泉坂下遺跡【茨城県常陸大宮市】

市域の東端付近を流れる^{くじかわ}久慈川とその支流^{たまがわ}玉川との合流点から北西に約3km、那珂台地から東に下った久慈川右岸の低位段丘上に立地している。

平成18年の学術目的調査によって確認された再葬墓遺跡で、1号墓坑から検出された4個体の土器のうちの1点が人面付壺形土器だったことが注目された。常陸大宮市教育委員会が、平成24年度から発掘調査を実施してきた結果、再葬墓30基を確認し、墓域は大きく東西の2群に分かれ、東群では24基、西群は6基で構成されていることが分かった。いずれも弥生時代中期前葉に属している。また、16基の土坑については、一次葬のためのものである可能性が考えられている。

出土土器で注目されるのは器高77.7cm、口径14.0cmの人面付壺形土器で、この種の土器では最大であり、人面の造作は立体的で、人面部は赤彩されていたと考えられる。

本遺跡は、弥生時代中期前葉の再葬墓遺跡として、遺構の残存状況は極めて良好で、墓域の全貌が判明した貴重な事例である。墓域が東西の2群に分かれていたことは、再葬墓が営まれた原理を知る事例を提供するなど、弥生時代前・中期の東日本で特徴的な再葬墓遺跡の様相を知ることができるという点で重要である。

4 さんやかいづか 山野貝塚【千葉県袖ヶ浦市】

山野貝塚は、千葉県の中央部、袖ヶ浦台地に立地する東西140m、南北110mの南東部が開口する大型馬蹄形貝塚である。東京湾東岸（房総半島西部）に集中する縄文時代後期から晩期にかけての馬蹄形の大型貝塚群の中で、現存する事例としては最南端に位置し、この貝塚群の広がりを考える上で欠くことのできない貝塚でもある。そのなかにおいて、縄文時代中期末葉から晩期中葉にかけての集落変遷が詳細に追え、特に、貝塚については、後期前葉から末葉までの形成過程がよくわかる稀有な事例である。土器には各時期の東北から近畿に及ぶ搬入品がみられ、他地域との交流が注目される。出土した魚類遺体の組成をみると、東京湾東岸の貝塚群のなかでも、北部の貝塚群において主体を成す内湾性のスズキとクロダイが多いという共通の特徴を示す一方で、南部の貝塚群の特徴である外洋性のマダイも一定量存在する。このことは東京湾東岸の中央部に位置する本遺跡の地理的特徴をよく表しており、東京湾東岸に集中する貝塚群の在り方考える上で重要である。なお、貝塚の遺存状態は極めて良好で、現在でも馬蹄形の貝塚の形状が目視で確認できる事例は当該地域ではもちろん、全国的にみても類例は少ない。

5 りくぐんいたばし か やくせいぞうしよあと 陸軍板橋火薬製造所跡【東京都板橋区】

明治9年（1876）に開業し、昭和20年（1945）の終戦まで続いた官営の西洋式火薬製造所跡である。荒川水系の石神井川しゃくじいがわ両岸に位置する。明治9年に旧加賀藩邸の一部に建設され、ほうへいほんしやういたばしぞくしやう砲兵本廠板橋属廠として発足した、明治政府が初めて新設した火薬製造所であった。石神井川の水力を利用し黒色火薬を製造し、明治10年（1877）に初めて検速儀を使った火薬試験射撃が行われた。これにより、火薬の性能を判定し、用途に応じた火薬の規格が定められた。明治26年（1893）からは綿火薬を主とする無煙火薬の製造が本格化し、また、爆発事故があつて火薬の安定度の研究が必要となったことから、同36年（1903）には製造所内に日本初の近代的な理工学系研究所である陸軍火薬研究所が設置された。

現存する遺構としては、明治10年以来試験射撃の射塚しゃだに使われたと考えられる築山つきやまの

ほか、昭和期の発射場跡、爆発の広がりを防ぐための土塁、燃焼実験室、現存長30.5mの弾道管、銃器庫、火薬貯蔵室、物理試験室、爆薬理学試験室など、火薬を作る上で必要な、研究、実験、製造、貯蔵などの一連の工程を示す遺構がそろっており、明治から昭和の陸軍火薬製造の在り方を理解することができる点で重要である。

6 利神城跡【兵庫県佐用郡佐用町】

中世から近世初頭にかけて、播磨国北西部の軍事・政治的拠点として営まれた城跡である。雲突城跡ともいい、兵庫県西部の山間地を流れる佐用川及び同川支流庵川の左岸、標高373mの利神山山頂部及び西山麓に所在する。戦国時代には別所氏の居城とされ、慶長5年(1600)、池田輝政が関ヶ原の戦の勲功によって播磨国52万石の国主となると、国内六支城整備の一環として、播磨・美作国境の要となる利神城の大規模改修が行われ、最後には平福藩(元和元年<1615>~寛永8年<1631>)の拠点として機能した。利神山の山頂を中心に、南北350m、東西200mの範囲に曲輪が展開し、天守丸・本丸・二の丸・三の丸には、高石垣が構築されている。また、西山麓の居館跡は、南北370m、東西110mの規模で、南北を石塁で仕切り、南側は前面に堀を有し、西側は佐用川と支流の庵川を自然の堀としていた。枳形虎口から山上の三の丸に向け登城道が延びる。近世初頭の高石垣を有する山城として、また山城と山麓の居館が一体として残る事例として貴重であり、中世城館から近世城郭への変遷、近世大名による支城体制を理解する上で重要である。

7 都塚古墳【奈良県高市郡明日香村】

6世紀後半から7世紀初頭の大型方墳である。南から舌状に伸びる尾根の先端部に位置し、東西約41m、南北約42m、高さ4.5m以上の規模を持つ。墳丘の北側では部分的に周溝を確認しており、本来は周溝が墳丘を全周していた可能性がある。墳丘東側で5段分、南側で3段分の段状の石積みを検出しており、類例のない階段状の多段築構造をなす。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、全長12.2m以上、玄室長5.3m、羨道長6.9m以上である。石室内には玄室から羨道にかけてバラスが敷かれており、U字形の暗渠排水溝が設けられる。玄室の中央には、身と蓋が完存する刳抜式家形石棺が安置されている。石棺は棺身の長さ2.23m、幅1.46m、高さ1.08mで、二上山産凝灰岩を使用する。出土遺物には、土師器・須恵器といった土器や刀子・鉄鏃・小札といった鉄製品などがある。

6世紀後半から7世紀初頭にかけて、最大規模の古墳の墳形は前方後円墳から大型の方墳へと変化するが、都塚古墳はその過渡期の様相を示す飛鳥地域の古墳であり、古墳時代から飛鳥時代への移行期の古墳の実態を示す事例として重要である。

8 やわたはまかいどうかさぎとうげごえ 八幡浜街道笠置峠越【愛媛県八幡浜市・西予市】

西予市宇和町うわちやうのまち卯之町と八幡浜を繋ぐ八幡浜街道の一部で、西予市宇和町岩木いわきと八幡浜市かまのくら釜倉の間にある標高397mの笠置峠を越える道である。南麓の安養寺が所蔵する大般若經奥書から、室町時代には峠を越えての交流があったことが窺える。また、宇和島藩主伊達家の記録や小原村おばら（西予市宇和町小原）の庄屋清家家せいけけの日記から、3代藩主宗賛むねよしが元禄14年（1701）にこの道を使って下向しており、以後、歴代の藩主が参勤交代に利用する道のひとつであったことがわかる。

峠に立つ地藏尊（寛政6年〈1794〉造立）の台座には、「あげいし」（第43番札所明石寺、西予市宇和町所在）などへの道程が追刻されており、西予市側の道端に残る遍路墓の存在からも、この道筋が九州方面からの巡礼者と四国遍路を結ぶ道として機能していたことがわかる。道筋は林道の敷設により改変されている箇所があるものの、西予市側約0.5km、八幡浜市側約1.1kmの区間に、道幅が1～2m程の地道が良好に遺存する箇所がある。参勤交代の道として、また、九州方面からの巡礼者と四国遍路を結ぶ道として、遺存状況の良好な箇所を指定する。

9 ふくばらちやうじゃばるかんがいせき 福原長者原官衙遺跡【福岡県行橋市】

福岡県と大分県との境にある英彦山山系ひこさんから派生する丘陵地先端付近の段丘面に立地する、古代の官衙遺跡である。本遺跡の遺構は三期に整理されている。Ⅰ期は7世紀末から8世紀初頭で、幅約3mの素掘りの区画溝が東西127.8m、南北135m以上の長方形にめぐり、その内側には掘立柱建物がある。Ⅱ期は8世紀第1四半期で、幅約5mに及ぶ素掘りの区画溝が約150m四方にめぐり、その内側には南門と東門をもつ掘立柱回廊状遺構がめぐる。区画内には正殿及び東西脇殿と推定される掘立柱建物群が建ち並ぶ。Ⅲ期は8世紀第2四半期で、Ⅱ期の正殿に相当する建物や南門、東門、回廊状遺構が建て替わり、簡素化する。

本遺跡はその規模において一般的な地方官衙を上回っており、またその構造から、藤原宮の平面プランをモデルとした格式高い行政施設である可能性が高い。成立時期が7世紀末まで遡る点は国府相当の施設としても最古級であり、しかも、その変遷を8世紀第2四

半期の終焉まで間断なく辿ることができ、古代律令国家成立期の地方統治の実態を知る上で重要である。

10 ^{みくも いわらいせき}三雲・井原遺跡【福岡県糸島市】

福岡県糸島市三雲及び井原に位置する弥生時代の集落跡で、発見は江戸時代に遡る。福岡県教育委員会・前原市（現糸島市）教育委員会による発掘調査の結果、遺跡は南北1,500m、東西750mで、弥生時代前期から後期さらに古墳時代前期にまで及ぶ。

墓域では、弥生時代早期から前期前半にかけての支石墓や甕棺墓が、弥生時代中期後葉には、江戸時代に発見された「伊都国」^{いとこく}最初の「王墓」と位置付けられる三雲^{みなみしろうじ}南小路1号・2号甕棺、弥生時代後期にも、多くの甕棺墓等を検出し多数の副葬品が出土している。居住域は、弥生時代前期前半に始まり古墳時代まで継続した。中央西側では一辺50mの方形区画であったと推定される大溝が確認されている。

出土遺物のうち、土器では吉備系・東海系の土器に加え半島系として^{らくろうけいどき}楽浪系土器・三韓系土器が注目される。青銅器の鋳型や武器、農工具などの鉄器が合計250点も出土している。

三雲・井原遺跡は北部九州地域を代表する拠点集落であり、中国の歴史書『魏志倭人伝』の「伊都国」の中心的集落と考えられ、弥生時代の政治・経済・文化の様相を知る上で重要である。

今回、加賀石地区の弥生時代前期前半の甕棺墓を検出した墓域と居住域、三雲南小路地区で発見された多数の副葬品をもち「王墓」と呼ばれる区画をもつ甕棺墓、遺跡のほぼ中央部で、多量の楽浪系土器、硯と想定される長方形の板石と竪穴建物を検出した番上地区を指定する。

11 ^{くすくいせき}城久遺跡【鹿児島県大島郡喜界町】

標高100m前後の海岸段丘に立地する9世紀から15世紀に至る集落遺跡である。9世紀から11世紀前半の越州窯系青磁など初期貿易陶磁器がまとまって出土しており、その出土量や内容から古代日本国家との関わりの中で交易拠点として成立した遺跡と評価されている。

11世紀後半から12世紀後半に集落は最盛期をむかえ、遺跡の最も高所に当たる地点では、倉庫を伴う大型の四面廂付掘立柱建物が検出されている。また、白磁玉縁碗や滑石製石鍋、カムイヤキなど、この時期の琉球、奄美地域で広く認められる遺物が多量に出土

するとともに、この地域では唯一の製鉄炉が検出されるなど、琉球、奄美地域における一大交易圏の中心となったと考えられる。13世紀になると集落の規模は縮小し、遺物の出土量も減少する。

こうした遺跡の展開は『日本紀略』や『吾妻鏡』に見える喜界島に関わる記事ともよく合致しており、考古学、文献史学の双方から、古代末から中世の南島社会の状況が分かる稀有な遺跡である。

《名勝の新指定》6件

1 ^{ゆばたけ}湯畑【群馬県吾妻郡草津町】

草津温泉の中心部に位置する源泉地で、毎分4,040ℓの自然湧出量を誇る。源泉は温度52.7℃、pH2.1の強酸性で、旅館や共同湯等町内80か所以上に引かれている。

室町時代中頃までの草津の様子はわかっていないが、15世紀の後半にはよく知られた存在であったことが文献等から窺える。その後、戦国時代以降は湯治場としての地位が確立された。江戸時代の絵図では、中央部分の上側に薬師堂、下側に湯畑が描かれており、草津がこれらを中心とする湯治場であることがよくわかる。明治以降も湯治場として栄え、近年は保養や観光目的の人々が多くを占めるようになったものの、現在でも年間数千人が長期間の湯治を行っている。

源泉から湧き出た湯は、^{ゆどい}湯樋を通った後に滝となって、また湯樋を通らない湯は凝灰角礫岩の表層を経て、やはり滝となって、それぞれ滝壺へ流れ落ちる。

現在も町の中心部に位置する湯畑の風致景観は他に例のない独特のものであり、その観賞上の価値は高い。

2 ^{えましやかたあとていえん}江馬氏館跡庭園【岐阜県飛騨市】

飛騨市域東半部の神岡町に所在し、高原川中流域右岸にある段丘中央部に立地している。14世紀から16世紀にかけて飛騨国吉城郡高原郷を本拠とし、北飛騨を掌握していた江馬氏に関連する遺跡群は史跡江馬氏城館跡に指定されている。江馬氏館跡庭園は、このうちの居館跡（下館跡）に発見された庭園遺構で、15世紀末から16世紀初頭にかけて完成したものと考えられ、平成11年度から平成22年度にかけて保存整備されて公開されている。

居館敷地の南西隅に、会所と土塀に囲まれた空間に景石石組みを伴う不整形の園池が設えられ、会所からは土塀越しに左手に高原諏訪城のある山を望み、右手にかけて北飛驒の山地を遠望する。土塀の内側には緩やかな野筋を設け、手前に園池を配する。園池には底打ちや導水路、排水路などは確認されず、池底は透水層から成って枯れ池の意匠を呈する点は、この庭園において特徴的である。

室町時代における庭園文化の地方への伝播と多様化を示す重要な事例として庭園史上の価値が高く、保存整備によって芸術上及び観賞上の価値も顕在化された。

3 櫻井氏庭園【島根県仁多郡奥出雲町】

江戸時代の松江藩鉄師頭取の住宅に造られた庭園であり、島根県仁多郡奥出雲町の上阿井内谷地内に位置する。

櫻井氏庭園の造営時期は明確にはわからないが、享和3年（1803）に松江藩七代藩主松平治郷（不昧）（1751～1818）が当地を訪れ、岩盤を流れ落ちる瀑布を「岩浪」と名付けたことから、少なくとも19世紀の初めには現在の庭園の骨格となる部分は造られていたと考えられる。また、その後の『安政二年家相圖』（1855）に描かれた園池や岩盤の様子は現在とほとんど変わらない。

庭園は主屋東端に位置する「上の間」からの観賞を主とする。上の間の前に園池があり、左手が滝になっている。約16mの高さから岩盤の斜面を流れ落ちる滝は、見る者を圧倒する。滝の水は庭園の近くを流れる内谷川を溯ったところから引いており、その距離はおよそ500mに及ぶ。園池の最奥部正面には、茶亭の掬掃亭が水面にせり出して建つ。

以上のように、江戸時代に造られた櫻井氏庭園は、特徴的な意匠で保存状態もよく、芸術上及び観賞上の価値、日本庭園史における学術上の価値が高い。

4 星ヶ森（横峰寺石鎚山遥拝所）【愛媛県西条市】

石鉄山横峰寺は四国霊場第60番札所で、霊峰石鎚山に続く山地の北側中腹（標高約750m）に位置する。星ヶ森は横峰寺の奥の院に相当し、境内地の南西端、加茂川によって開析された石鎚山北側の谷を挟んで石鎚山脈とほぼ並走する尾根稜線の鞍部（標高約820m）に所在する霊峰石鎚山の遥拝所である。

「星ヶ森」の名称は、空海がこの地で星に除災求福を祈る法会の星供養を行ったことに由来すると伝えられている。『四国遍路道指南』（貞享4年〈1687〉）に記載がみられることから、遅くとも江戸時代前期には鉄の鳥居が設けられていたことが窺われる。『四国遍

路名所図会』(寛政12年〈1800〉)や『四国遍路道中雑誌』(弘化元年〈1844〉)には、石鎚山に向かって尾根の鞍部に鳥居が描かれ「石鉄山遥拝」と記されている。

星ヶ森は、霊峰石鎚山を北側から南方に向かって遥拝する固有の展望地点として江戸時代以来の名所で、石積みを伴って形成された平地には鉄の鳥居や弘法大師坐像を安置する石龕せきがんなどが設えられており、信仰に関連する優れた風致景観を觀賞する場として重要である。

5 てんねんじや ばおよ むどうじや ば天念寺耶馬及び無動寺耶馬【大分県豊後高田市】

古来より山岳信仰の場となってきた国東半島では霊場が形成され、「峯入り」と呼ばれる回峰行を通じて密接な繋がりを有してきた。天念寺と無動寺では、古代から中世にかけて背後(北側)に高くそびえる岩山が修行の場として定着し、江戸時代以降、国東六郷満山霊場として名所にもなった。

天念寺耶馬は、都甲谷とごうの奥、長岩屋川の右岸に位置し、石仏や石塔を祀った岩屋群や難所が霊場の風致を伝えるほか、岩峰群が屹立し、特に高所から深く狭隘な谷を成す部分に架けられた石造の無明橋むみょうばしは風致景観上の特徴を成す。長岩屋川の河道中に所在する巨石には中世に水害除けを祈念して刻まれたと伝えられる川中不動(不動三尊像)が風情を加える。無動寺耶馬は、真玉川またまがわの右岸に位置し、無動寺境内と身濯神社みそぎの背後に切り立つ岩山から成り、山内には天念寺耶馬と同様に石仏を安置した岩屋や無明橋が所在する。

固有の岩峰や岩屋、無明橋などから成る優れた風致景観で、古代以来の信仰を通じた密接な連続性を示すとともに、相互に眺望の対象となっている点で顕著な特徴を有する。

6 う だ鵜戸【宮崎県日南市】

宮崎県の南部、日南市北部の海岸沿いに位置する。西に急峻な山稜を背負い、東は入り組んだ海岸線とその先に広がる日向灘から成る。宮崎市青島から日南市風田かぜたにかけての日南海岸には、宮崎層群の中でも古い時代の地層が露出しており、それらは砂岩と泥岩が繰り返す互層から構成される。そして、それらが波の浸食を受けて形成された波食棚や海食洞、ノッチが随所に見られる。この波食棚は鵜戸千畳敷う だ せんじょうじき(通称「鬼の洗濯板」)と呼ばれている。隆起海食洞については、鷗鷯草葺不合尊う が や ふきあえずのみことを主祭神とする鵜戸神宮の境内に最大のものがあり、約1,000㎡の洞内に18世紀に改築された本殿が建つ。また、鵜戸神宮の北方に位置する波切神社なみきりの洞穴は、現在の汀線付近に存在するノッチである。

鵜戸神宮は南九州を代表する神社で、古来より日向国内外の厚い信仰を受けており、

近世には^{おび}飢肥藩主伊東氏の庇護のもとで造替や改修が行われた。また、鶺鴒戸一帯は海幸彦と山幸彦の神話の舞台でもあり、さまざまな伝承が知られている。

特徴的な地形及び地質によって形成された風致景観は古くから信仰とも密接に結び付き、観賞上の価値が高い。

《天然記念物の新指定》 1件

1 ^{ことがはま}琴ヶ浜【^{しまね}島根県大田市】

島根県中央部沿岸の大田市^{にまちょうまじ}仁摩町馬路に位置する琴ヶ浜は、日本有数の鳴き砂浜である。鳴き砂は主に円磨された石英砂で構成されており、広い範囲で良好に維持されている。地元で鳴き砂は「鳴り砂」と呼ばれて親しまれており、地域住民による保全活動も盛んである。

琴ヶ浜は、複雑に入り組んだリアス海岸の湾奥に位置し、延長1.38kmの円弧状の砂浜で、湾口長2.25km、奥行き長1.20kmである。湾は西北西方向へ大きく開いているため、冬季に卓越する西北西の季節風やそれによる風波が直接入り込む形状となっている。海底地形は、湾の開口部付近でも水深20mあまりにしか達しておらず、顕著な遠浅である。泥などの細粒成分は、湾外へと運び去られているため、湾内は細粒砂が卓越し、極細粒砂より細かい粒子はほとんど含まれていない。水深10m以浅に砕波帯が位置しており、波浪により石英砂が往復運動して洗浄・円磨される環境が維持されている。

したがって、琴ヶ浜は、湾の構造や風波が大きく関わって、鳴き砂を安定して供給し維持する機能を保持していること、また鳴き砂が浜全体に広く分布することなど、清浄な海浜の象徴でもある鳴き砂浜の典型として貴重である。

《特別史跡の追加指定》 1件

1 ^{ふじわらきゅうせき}藤原宮跡【^{なら}奈良県橿原市】

持統天皇8年（694）から和銅3年（710）まで営まれた古代の都城跡。藤原京跡の中心部に位置し、約1km四方の区画内に内裏・大極殿、役所群が建てられた。北辺を中心に条件の整った部分を追加指定する。

《史跡の追加指定及び名称変更》 3件

1 おおとり いやま いせきつげたりじんだて いせき 大鳥井山遺跡 附 陣館遺跡【秋田県横手市】



(旧名称)

おおとりいやまいせき
大鳥井山遺跡

11世紀に奥州を支配した清原氏関連の遺跡。平泉文化だけでなく、奥州の中世社会の成立を知る上で重要。既指定の大鳥井山遺跡に、同時期の四面廂付掘立柱建物などが検出された陣館遺跡を追加指定し、名称を変更する。

2 さぬきへんろみち 讃岐遍路道

まんだらじみち
曼荼羅寺道

ぜんつうじけいだい
善通寺境内

ねごろじみち
根香寺道

【香川県高松市・坂出市・善通寺市・三豊市】



(旧名称)

さぬきへんろみち
讃岐遍路道

まんだらじみち
曼荼羅寺道

ねごろじみち
根香寺道

善通寺は、弘法大師空海の誕生の地とされ、高野山金剛峯寺、東寺（教王護国寺）と並ぶ大師三大霊跡の一つとして、古くから人々の信仰を集めた。江戸時代には第75番札所として四国遍路の中核を担った。東院、西院と、それらの西に位置するこうしきざん香色山を含めた範囲を追加指定し、名称を変更する。

3 いよへんろみち 伊予遍路道

いなりじんじゃけいだいおよ りゅうこうじけいだい
稻荷神社境内及び龍光寺境内

ぶつもくじみち
仏木寺道

よこみねじみち
横峰寺道

よこみねじけいだい
横峰寺境内

さんかくじおくのいんみち
三角寺奥之院道

【愛媛県宇和島市・西条市・四国中央市】



(旧名称)

いよへんろみち
伊予遍路道

ぶつもくじみち
仏木寺道

よこみねじみち
横峰寺道

空海ゆかりの寺社を巡る全長1,400kmに及ぶ霊場巡拝の道の一部。今回、第41番札所龍光寺（江戸時代には稲荷社が札所）と第60番札所横峰寺の各境内と、第65番札所三角寺の奥之院までの遺存状況が良好な約3.8kmの道を追加指定し、名称を変更する。

《史跡の追加指定及び一部解除》1件

1 とうじんこふんぐん 唐仁古墳群【鹿児島県肝属郡東串良町】

墳長140mの唐仁大塚古墳をはじめ3基の前方後円墳と、119基の円墳から成る古墳時代中期の列島南端の古墳群である。古墳時代中期のヤマト政権と地方の関係を知る上で重要。指定は昭和9年で、指定されていない範囲で新たに確認された19基の古墳を追加指定するとともに、発掘調査により古墳が存在しないことを確認した範囲等を指定解除する。

《史跡の追加指定》24件

1 たごやのかいづか 田小屋野貝塚【青森県つがる市】

縄文時代前期から中期に及ぶ貝塚を有する集落遺跡。近年の発掘調査により居住域の変遷や構造、貝類の分析から遺跡の東側に広がっていた古十三湖との関係性が明らかになった。今回、条件の整った居住域部分を追加指定する。

2 せんたいこおりやまかんがいせきぐん 仙台郡山官衙遺跡群

こおりやまかんがいせき
郡山官衙遺跡

こおりやまはいじあと
郡山麁寺跡

【宮城県仙台市】

東北地方最古の官衙遺跡とそれに伴う寺院跡から成る遺跡群。7世紀半ば大化改新のころに成立し、奈良時代前半に造営される多賀城の成立期前後まで営まれた。今回、条件が整ったⅡ期官衙中枢部の北東部の一角を追加指定する。

3 ゆう き はい じ あとつけたりゆう き はちまんかわらがまあと 結城麿寺跡 附 結城八幡瓦窯跡【茨城県結城市】

下総国北端の鬼怒川西岸の台地上に立地する古代寺院跡。西に金堂，東に塔が並ぶ。平将門の乱を記述した『将門記』にも記載がある寺跡で，仏教文化の東国への伝播と発展を示す。今回，条件の整った部分を追加指定する。

4 いわじゆくいせき 岩宿遺跡【群馬県みどり市】

確実な旧石器時代の人工品として学界で広く承認された石器が出土し，我が国の人類文化の起源が旧石器時代にまで遡ることをはじめて立証した遺跡。今回，条件が整った部分を追加指定する。

5 しんぶくじ かいづか 真福寺貝塚【埼玉県さいたま市】

北西部の低湿地に向けて開口部を有する東西160m，南北180mの馬蹄形集落であり，その北東部には地点貝塚が存在する。出土遺物のうち，昭和32年（1957）に重要文化財に指定された通称「ミミズク土偶」は有名。今回，条件が整った部分を追加指定する。

6 ひ き じょうかんあとぐん 比企城館跡群

すが や やかたあと
菅谷館跡

まつやまじょうあと
松山城跡

すぎやまじょうあと
杉山城跡

おぐらじょうあと
小倉城跡

【埼玉県比企郡嵐山町・吉見町・ときがわ町・小川町】

やまのうち おうぎがやつ 山内・扇谷両上杉氏や小田原北条氏による抗争の中，ひ き埼玉県比企地域に営まれた関東を代表する中世城館の遺跡群。菅谷館跡，松山城跡，杉山城跡，小倉城跡から成り，15世紀後半から16世紀を中心とする政治・軍事の状況を良好に示している。今回，条件の整った松山城跡の一部を追加指定する。

7 ^{むさしこくぶんじあとつけたりとうさんどうむさしみちあと} 武蔵国分寺跡 附 東山道武蔵路跡【東京都府中市・国分寺市】

奈良時代、聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺の一つ。金堂跡や講堂跡等が良好に残り、二つの塔跡も見つかった。今回、附指定である東山道武蔵路跡（上野から分岐して武蔵に向かう官道）の一角を含む、3地点を追加指定する。

8 ^{うまたかさんじゅういなばいせき} 馬高・三十稻場遺跡【新潟県長岡市】

北陸における縄文時代中期から後期にかけての集落変遷が辿れる代表的な集落跡。特に、馬高遺跡は、数ある縄文土器のなかでも、その象徴的存在として世界的にも有名な火焰土器が初めて出土した遺跡として学史的にも重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

9 ^{さどきんぎんざんいせき} 佐渡金銀山遺跡【新潟県佐渡市】

近世から近代の我が国を代表する金銀山遺跡。佐渡奉行所、^{どうゆうわれとつるし}道遊の割戸、鶴子銀山、石切場、北沢の選鉱場、水力発電所等の遺跡から成る。今回、^{とじがわ}戸地川第二発電所への送水施設（水路）のうち、当時の遺構が確認された部分（延長2.0km）を追加指定する。

10 ^{まつもとじょう} 松本城【長野県松本市】

信州の中心的近世城郭。南・西外堀と東総堀は明治時代になって民間に払い下げられ、大正時代になると宅地として埋め立てられた。絵図や発掘調査によって明らかとなっているこれらの堀の一部を追加指定する。

11 ^{おとづかこふんつけたりだんじりまきこふん} 乙塚古墳 附 段尻巻古墳【岐阜県土岐市】

7世紀前葉の巨大な横穴式石室を持つ東美濃の首長墓。石室の形状や出土須恵器には畿内地域の影響が認められるなど、美濃における首長の動向を知る上で重要。墳丘と古墳が築かれた丘陵の一部を追加指定する。

12 ^{いせこくふあと} 伊勢国府跡【三重県鈴鹿市】

古代伊勢国の国府跡。国庁は建物基壇の遺存状況がきわめて良好に遺存する。周辺には都城の条坊に類似した方格地割があり、そのなかに国司館等と推定される大型の瓦葺建物群が2カ所確認されている。今回、これらの瓦葺建物群の隣接地のうち、条件の整った部分を追加指定する。

おう みおおつのみやにしこおりいせき
13 近江大津宮錦織遺跡【滋賀県大津市】

天智天皇6年(667)、中大兄皇子(天智天皇)が飛鳥から遷都し、天武天皇元年(672)まで営まれた5年間の宮跡。発掘調査によって、内裏南門、内裏正殿と考えられる遺構が見つかった。今回、内裏跡の一角と考えられる地点を追加指定する。

しみずやまじょうかんあと
14 清水山城館跡【滋賀県高島市】

琵琶湖の西岸に位置する城館跡で、佐々木越中氏の本拠地とされる。主郭や御殿のあった清水山城遺跡、家臣団の居宅や寺跡があったと考えられる清水山遺跡や本堂谷遺跡に分かれる。多数の堀と土塁が良好に残る。今回、条件の整った部分を追加指定する。

たんばこくぶんじあとつげたりはちまんじんじやあと
15 丹波国分寺跡 附 八幡神社跡【京都府亀岡市】

奈良時代、聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺の一つ。発掘調査によって塔跡、金堂跡、講堂跡、僧坊跡、梵鐘鑄造遺構等が見つかった。今回、既指定地の南側に沿った場所等を追加指定する。

たじまこくぶんじあと
16 但馬国分寺跡【兵庫県豊岡市】

奈良時代、聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺の一つ。金堂、中門、回廊や塔の遺構が見つかっており、木簡も多く出土し、経営状況がよくわかる。今回、条件の整った部分を追加指定する。

ふじわらきょうあと
17 藤原京跡

すざくおおじあと
朱雀大路跡

さきょうしちじょういち にぼうあと
左京七条一・二坊跡

うきょうしちじょういちぼうあと
右京七条一坊跡

【奈良県橿原市】

持統天皇8年(694)から和銅3年(710)まで営まれた古代の都城跡。中心にある藤原宮跡は特別史跡となっている。朱雀大路跡は宮の正門である朱雀門から南へ延びる道路跡で、それを境に西側を右京、東側を左京に区分する。今回、条件の整った左京部分の一部を追加指定する。

18 つくりやまこふん だいち に さん よん ご ろくこふん 造山古墳 第一, 二, 三, 四, 五, 六古墳【岡山県岡山市】

造山古墳は墳長約350mの我が国を代表する古墳時代中期の大型前方後円墳であり、周辺の6基の古墳とともに大正10年（1921）に史跡指定された。造山古墳の南半は古くからの集落であり指定範囲外であったが、測量調査により集落内に墳端を確認したため、今回、条件が整った部分を追加指定する。

19 しょうずいじょうかんあと 勝瑞城館跡【徳島県板野郡藍住町】

室町時代に阿波国守細川氏が守護所を置き、戦国時代、戦国大名三好氏が本拠地とした遺跡。庭園を有する居館跡、土塁と堀を有する城跡、祈願寺である正貴寺跡から成る。今回、条件の整った勝瑞城跡の堀の南側部分を追加指定する。

20 むなかたじんじゃけいだい 宗像神社境内【福岡県宗像市】

『古事記』や『日本書紀』にもみえる、我が国を代表する神社の一つ。へつみや なかつみや おきつみや 辺津宮・中津宮・沖津宮の三つの宮から成る。沖津宮が鎮座する沖ノ島は島全体が境内地で、祭祀遺跡があることで著名。今回、沖ノ島と一体となる海域を追加指定する。

21 じょうやまよこあなぐん 城山横穴群【福岡県田川郡福智町】

200基を超える横穴の数と分布密度において他を圧倒する、九州を代表する横穴群。横穴群の造営過程や埋葬儀礼のあり方を知る上でも重要な事例。今回、条件の整った部分を追加指定する。

22 いしづかやまこふん 石塚山古墳【福岡県京都郡苅田町】

墳長130mで、後円部の竪穴式石室からは、三角縁神獣鏡をはじめ玉類、鉄製武器等豊富な副葬品を有する古墳時代前期の大型前方後円墳。九州における古墳形成を考える上で重要。今回、条件の整った部分を追加指定する。

23 いでらこふん 井寺古墳【熊本県上益城郡嘉島町】

5世紀後半頃に築造された日本を代表する装飾古墳であり、平成28年（2016）の熊本地震により墳丘や石室に甚大な被害を受ける。地震後に行った測量により前方後円墳の可能性が高まり、条件の整った部分を追加指定する。

24 ^{むかさじょうあと} 穆佐城跡【宮崎県宮崎市】

南北朝時代には室町幕府による支配の拠点として、室町・戦国時代には伊東氏と島津氏が争奪を繰り返した舞台となった城跡。シラス台地上に位置し、郭群、土塁、堀切等の遺構が極めて良好に遺存する。今回、条件の整った中心郭群の南西に隣接する部分を追加指定する。

《名勝の追加指定及び名称変更》 1件

1 ^{えんげつとう たかしま せんじょうじき さんだんべき} 円月島（高嶋）・千畳敷・三段壁【和歌山県西牟婁郡白浜町】

↑

（旧名称）

^{えんげつとう たかしま およ せんじょうじき}
円月島（高嶋）及び千畳敷

三段壁は白浜半島の南西部に位置し、新生代新第三紀の砂岩（田辺層群白浜累層）から成る壮麗な海岸段丘である。断崖絶壁にある洞窟などを含めて、江戸時代以来の名所として、円月島（高嶋）及び千畳敷とともに白浜海岸の優れた風致景観として重要であることから、三段壁を追加指定し、名称を変更する。

《天然記念物の追加指定》 1件

1 ^{し が こうげんいし ゆ せいそくち} 志賀高原石の湯のゲンジボタル生息地【長野県下高井郡山ノ内町】

標高約1,600mもの高標高地に所在し、河川に流入する温泉水により維持されているゲンジボタルの生息地。成虫の発生期間も平均3か月以上と長く、他の生息地にはない特徴を有しており重要である。今回、条件の整った部分を追加指定する。